

首長の墳墓に供献されている。

古代中国では遷都や戦争など国の命運にかかわる重要な事項を決定する際には海亀の甲羅を用いて占いが行われた。列島内でも古墳時代には亀の甲羅を使用して亀卜きぼくが行われていたが、弥生時代には鹿の骨を使った占いがあった（神沢勇一「弥生時代・古墳時代および奈良時代の卜骨・卜甲について」『駿台史学』第三八号、一九七六）。また、中国地方の分銅形土製品や東日本の円板形土製品は護符のような用途が考えられている。

その他 弥生時代にはすでに糸で織った布があったが、その道具 糸を紡ぐ道具に紡錘車ほうすいしゃ（図2—42・10）がある。

直径五ご程度じょうどの円板の中央に孔を開け、そこに棒を挿した道具で、繊維に繕よりをかけて糸をつくるものである。吉野ケ里遺跡では絹・麻などの繊維が付着した銅剣が出土しているが、その絹にはアカニシを材料とした貝紫やアカネソウを使用した茜あかねで染めたものがある（前田雨城・下山進・野田裕子「吉野ケ里遺跡出土染織遺物の染色鑑定 科学調査について」佐賀県教育委員会『吉野ケ里遺跡』吉川弘文館、一九九四）。

三 集落と墓地

水田経営に伴う水田の開発や灌漑施設の設置、更には稲の栽培には共同作業が不可欠となる。そのため、弥生人は数軒を単位とした集落を営む。このような数軒の住居と一、二棟の倉庫

からなる「単位集団」が、共同体を構成する基礎単位と考えられている（近藤義郎「共同体と単位集団」『考古学研究』二二号、一九五九）。弥生時代の集落は生産地としての水田が洪水などの自然災害で放棄されるか又は戦闘行為で破壊されない限り、一定期間同じ場所に継続する傾向が強い。一方では水稲耕作にはまったく適さない地形に立地する集落もある。

集落の種類と施設 水稲耕作を主たる生業として行う集落は、通常たうじょうの低い丘陵や台地上に立地する。

前期の前半代では単独又は数単位の単位集団が、河川の下流域の低湿潤地周辺に散在して小集落を営むことが多い。後半代になると平野ごとに拠点となる大集落が形成され始める。拠点集落と周辺集落とは水田経営などの生産活動を通して密接に結びつき、人口の増加や生産地の拡大に伴い、この集団から派生した分村的な小集落が河川の中流域へ進出していく。拠点集落では数百ひゃくの敷地に数十軒の住居が建ち並び、一〇〇人以上の人口を抱えていたと考えられる。

環濠集落（図2—45）は縄文時代終末の夜臼式の時期の例が福岡市那珂遺跡や福岡県粕屋町江辻遺跡で調査されている。江辻遺跡では環濠内部の中央に大型建物と高床倉庫が建てられ、その周縁部に松菊里型の竪穴住居が配置されていた。弥生時代前期初頭になると福岡市板付遺跡のように環濠で囲まれた内側

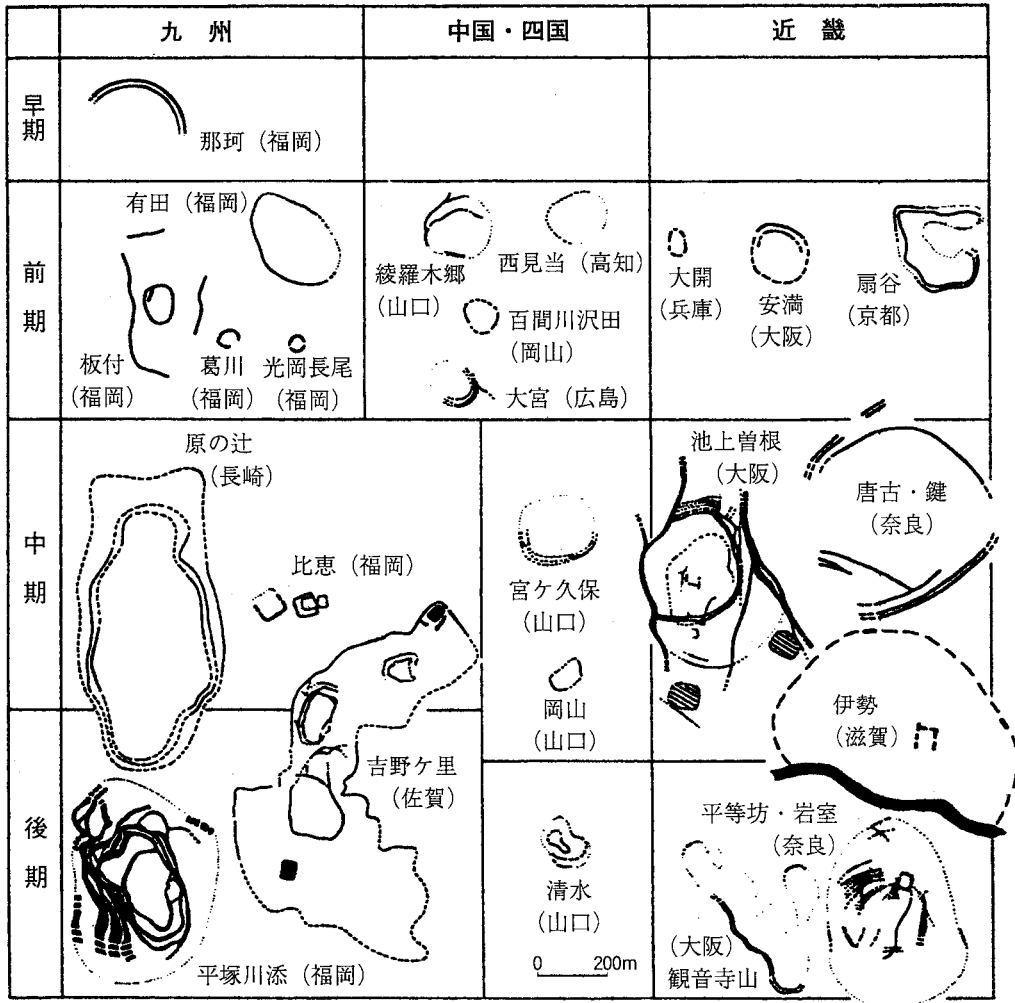


図2-45 西日本の環濠集落

に貯蔵穴などの食料の保管施設が設置され、住居は環濠内には作られないことが多い。前期後半から中期になると吉野ヶ里遺跡や甘木市平塚川添遺跡のような拠点集落を中心に、環濠を何重にもめぐらす集落が増加してくる。

また、西日本の瀬戸内海沿岸から近畿地方で、中期中ごろから後期にかけて高地性集落が展開する。高地性集落は香川県紫雲山^{でやま}遺跡に代表されるように、平地から数十メートル以上の高い丘陵や山の上に営まれる比較的小規模な集落である。その性格は軍事的・防衛的役割を果たす見張りや烽火^{のろし}を使った通信を行う施設と考えられている。

中期後半以降に出現する環濠集落や高地性集落は、当時の社会的な緊張状態や争乱を反映した集落である。

これら以外にも、海岸部では漁労・製塩などの生業や海上交通に関わる集団が営む集落がみられる。これらの集落ではタコ壺や製塩土器が多量に出土し、他地域の土器が高い割合で発見されることが多い。

集落を構成する基本的な施設は住居と倉庫であり、他に道具を生産する工房や祭祀のための建物・井戸などがある。また、防御のための環濠を集落の周囲にめぐらす場合もある。

住居と倉庫

住居は一般的に竪穴住居で、床面の形は前期・中期では円形のもものが多く、後期になると大部分が方形になる。床面の大きさは直径又は一辺が五〜六メートルが標準的で、一軒の住居には五、六人程度の家族が生活していた。住居内の中央部には炉が作られ、床面が円形の住居では柱も円形に数本から十数本めぐらされる。北部九州の前期の住居には炉の両側に小ピットを伴う松菊里型と呼ばれる住居がある。後期の方形竪穴住居では、中央の炉をはさんで二本又は四本の柱が左右対称に配置され、入り口の壁際に屋内土壇と呼ばれる小竪穴が掘り込まれている。また、壁際にはベッド状遺構という、中央部の床面より一段高い方形の作り出しを伴うものも多い。竪穴住居の屋根は切妻造りか寄棟造り、あるいは原始的な入母屋造りなど各種あり、茅葺きのものが多い。掘立柱建物は一般の平地式住居として使用されたが、大形の高床式住居は神聖な空間か又は地域集団を統括する首長の住居として、地域の拠点集落で発見される場合が多い。大阪府池上曾根遺跡の大形建物（写真2—5）は長さ約一九・三メートル、幅七・〇メートル、約一三五平方メートルの床面積をもつ中期の高床式建物である。

食料を貯蔵する倉庫には、地面を二層ほど掘りくぼめた袋状



写真2—5 池上曾根遺跡の復元大形建物（和泉市教育委員会所蔵）



写真2—6 高床倉庫

堅穴又は貯蔵穴と呼ばれる施設がある。貯蔵穴は中国ではすでに初期の水稲農耕集落でみられるが、列島内でも弥生時代の初期から使用されている。貯蔵穴へ食料を貯蔵する場合、現代の気候では夏季の高温・高湿度の環境では粉は発芽してしまうことが予想されている（井上裕弘・藤瀬禎博「袋状堅穴の機能に関する諸問題」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第七集、福岡県教育委員会、一九七八）。このため、稲粃又は脱穀した米の保管庫としての使用は、収穫後の冬季から春季に限定されていた可能性がある。また、貯蔵穴には米以外にも堅果類を貯蔵していたことが考えられる。

貯蔵穴の床面には直径二〇〜三〇センチほどの浅い穴があげられているものがあるが、京都府温江遺跡の調査例（京都府遺跡調査概報第37冊、京都府埋蔵文化財調査研究センター財、一九九〇）に見るように梯子を固定するための施設と考えられる。

高床倉庫（写真2—6）

はアジア東南部に多くみられる建築様式で、すでに縄文時代中期から存在するが、弥生時代の食料保管庫としては中期から普及し始める建物である。中期の後半代が貯蔵穴から高床倉庫への転換期と考えられる。

墓地の 弥生時代は水田経営を行うための集落の結束が種類と施設 強く、墓地は基本的に集落が所属する共同体によつて定められた場所に集団墓地として営まれた。しかし中期

から後期に向かつて共同体の指導者の統率力が高まり、隣接地域の共同体との統合が進んでくると、その首長層は集団墓地とは別に独自の墓地を営むようになる。北部九州では中期前半から銅鏡や武器・玉類などを豊富に副葬する墓地がみられるが、後期後半になると溝で区画した方形周溝墓や、盛土をもつ墳丘墓が形成される。瀬戸内の吉備地方では中期後半から台状墓や墳丘墓が出現するが、後期後半の岡山県倉敷市楯築墳丘墓は円丘の両側に突出部をもつ形態をなし、墳丘は全長八〇センチ前後に達し、墳丘上には特殊器台形土器が立てられていた。この特殊器台形土器は古墳時代の円筒埴輪の起源となる土器である。日本海沿岸の出雲地方では方形の墳丘の四方に突出部を付ける四隅突出型の墳丘墓が主流であり、近畿地方でも中期から方形周溝墓が営まれた。このように西日本の各地の首長層は、所属する広域の共同体が創造した個性的な特定集団墓を築造している。

一方、集落の一般成員が営む共同墓地は、集落にやや近い別の丘陵上などに立地する。個々の埋葬施設は列を成して尾根筋に並行に配置され、その周囲の斜面際に墓前祭祀に使用された土器などを廃棄した祭祀遺構が掘られている。ただし、乳幼児は集落内の住居に隣接した場所に葬られることが多い。

各種の埋葬施設 弥生時代の埋葬施設には土壙墓・木棺墓・石蓋埋葬施設 土壙墓・箱式石棺墓・甕棺墓などがある(図2-46)。

土壙墓や木棺墓は各地で普遍的に見られる埋葬施設である。土壙墓(図2-46・3)は地面を素掘りして棺としたもので、木の板で蓋をしたものも多い。木棺墓(同・5)は素掘りの土壙の中に木の板を箱形に組み合わせて棺としたものである。西日本では後期になると首長層の墓を中心に割竹形木棺も登場する。

石蓋土壙墓・箱式石棺墓は、九州から山口県地域で前期からみられる。石蓋土壙墓(同・2)は素掘りの土壙に板状の石で蓋をするもので、箱式石棺墓(同・1)は蓋と四周の壁に石を立て並べて棺とするものである。

甕棺墓(同・4)は北部九州で前期から採用されている墓制で、高さ一辺に達するような大形の甕を単独又は二つ合わせて使用する埋葬施設である。

これら以外にも石棺墓などの上に大きな石を載せる支石墓と

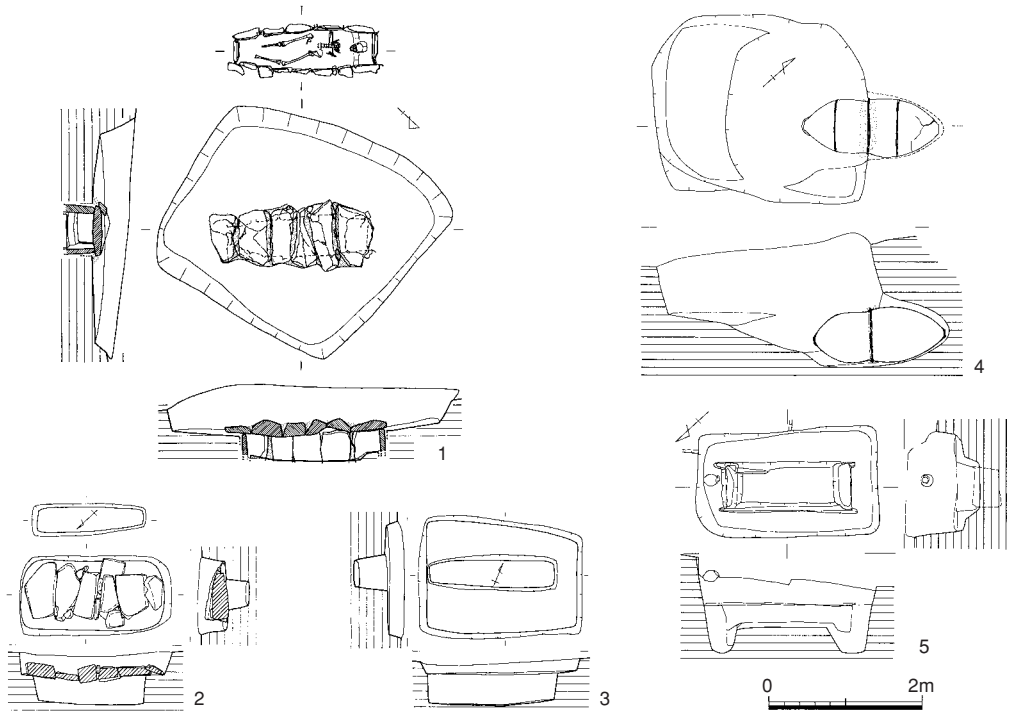


図2-46 各種の埋葬施設

呼ばれる墓制がある。これは九州北西部の沿岸に多く分布し、朝鮮半島の無文土器文化の影響がうかがわれる墓である。

四 クニの発生と展開

人類の歴史で、農耕社会が始まり比較的安定した食糧生産が実現すると、余剰生産物が蓄積されてくる。人はこれを奪取するために争うことが常であった。弥生時代の社会においても前期の初頭から食料を保管した貯蔵穴を守るために周囲に環濠をめぐらす例が多々あり、米を求めて長い争乱の時代が続くことになる。

村 から 先にも簡単に述べたとおり、弥生時代の初期にクニへ 小さな共同体として出発した小集落は、前期後半になると、より広範囲の水田経営を行うために大規模な拠点集落を形成する。拠点集落は大きな平野の中では数^{km}の距離を隔てて点在していた。中期以降、このような拠点集落のうち強力な集落は周辺地域の集落を統合していき、ついにはその平野全域に強い影響力を及ぼすこととなる。こうして地域ごとに利害を共有する「クニ」と呼ばれる社会集団が誕生する。クニを統括する首長は地域内の各集落に所属する一般の人々から、しだいにかけ離れた存在へと変貌していく。

集落の統合は政治的な手段により平和裏に進められることもあっただろうが、防衛的な環濠集落が存在することをみても武

力によって達成される場合も多かったことが分かる。

この時期の埋葬施設からは矢じりや剣の切先が出土したり、戦闘によって骨格の一部を損傷した人骨、更に頭部がない人骨が発見される場合さえある（写真2-7）。

紀元後八二年前後に後漢の班固が前漢の歴史を記した『漢書地理誌』では、紀元前一世紀の列島の状況について「夫れ楽浪海中に倭人有り、分かれて百余国と為る。歳時を以て来り献見すと云ふ」とある。中期後半の時期にこれらのクニは平野を単位として経済的に独立し、朝鮮半島の楽浪郡を通じて漢と交渉をもっていたことが分かる。

倭国大乱と卑弥呼

四三一年ころ南朝の宋の范曄の撰になる『後漢書東夷伝』では後期の状況が分かる。それによると「桓・霊の間、倭国大いに乱れ、更々相攻伐し、歴年主無し」と伝えられており、後漢の十一代桓帝・十二代霊帝が在位中の二世紀後半の時期、列島では各クニの間で争



写真2-7 頭部のない人骨（筑紫野市教育委員会所蔵）